女体試測4
悪凌胎産火星編
SlaveFighter MARS
GLAMOUR WORKS
ADULT ONLY

その日、火野レイの元に届いた手紙は大変に衝撃的なものだった…
ここ最近次々と失踪した彼女の友人…木野まこと、水野亜美、愛野美奈子
の正視に堪えぬような凄惨な姿が写された写真が数枚同封されていたのだ
それは幾多の戦場をくぐりぬけた彼女が思わずよろめくほどのものだった
！

その日の深夜、レイは巫女装束に身を包み十番町の闇を歩いていた
写真に添えられた文面にはこうあった
「この件に関する説明ど提案がある。指定の場所までおいで願い足し」
霊感の強いレイにはもうひとつ気づいたことがあった
手紙にわずかながら纏わりついた妖しげ気配、それは人間のモノではなかったのだ

曲がりくねった路地を通りぬけ、どことも知れぬ地下室にレイは辿り着いた
一見誰もいないように見えたが暗闇の奥に蠢く気配をレイは感じ取っていた
やがて粘液の塊がずるりとレイの前に這いずりよってくるや、身をおこした
それは頭と左腕のみの奇怪な粘液人間だった
(やはり妖魔…)
レイは気づいていた。今や彼女の周囲を取り囲む異形のモノどもの存在を

「…いやあ悪いな。こんなとこまで呼び出して」
妙に軽薄な口調で妖魔が口を開いた。妖魔の目に瞳孔らしきものはなかったが
その動きからレイの肢体を服越しにねぶるように視姦してるのがわかった
「三人はどこ?」
おぞましさに怖気をふるいながらもレイは尋ねる
「おおっと勘違いするなよ。あいつらをあんな目にあわせたのは俺らじゃねえ」
「まあここで‘仲良く’はしてたがね。くくく…」
妖魔の話は続く
闇の住人たちの闘争、捕らえられ改造されたセーラーウラヌス、ウラヌスの
恐るべき戦闘力の前に敗れ去った仲間たち…捕らえられ生体実験に供される
ジュピター、マーキュリー、ヴィーナス…

「それで？なにが言いたいのよ」
「なにね。あんたらにちょいと力を貸してやろうかと思うんだが」
「はあ？！冗談じゃない！妖魔の手助けなんてごめんだわ！」
「別に断ってくれてもかまわんよ。ただね。もうプリンセスを守るセーラー戦士もあんたが最後だ。もう何人かは助けは呼べるかもしれんが、それであのおっそろしいダイモーン‘ウロラヌス’に勝てるのか？自信があるならかまわんがね。あんたが奴らを始末してくれるなら俺らとしても大助かりだからな」
「…くッ！」
「あんたがその肉体を捧げるなら俺らはあんたにエナジーを注ぎこむ。無理矢理な外法だから効果は一時的だが相当な強化が可能なはずだ。…ちょうどうちの手下があんたのお仲間の最新映像をとってきたみてえだ。これでも見ながらゆっくり考えてくれや」

なにかの容器か水槽のような空間にヴィーナスが入れられていた
手足は容器の外に飛び出るように固定され身動きもままならないようだ
ヴィーナスの顔の前には植物のような触手が彼女の顔を撫で回すように蠢く
ヴィーナスは歯を食いしばり顔をそむけなんとか触手をさけていたが
「聞き分けがない子ね。仕方ない」
どこからか女の声がすると下から棒状の器具がせりあがり
ヴィーナスの股間にずぶりと挿し込まれた「ヒィぐぅッ！」

「うあぁッ！むごぉッ…うぐぅぅぅ！！」
ヴィーナスの膣に挿入された器具が唸りをあげて跳ね回った
たまらず悲鳴をあげたヴィーナスの口に緑の触手が待ち構えていたように侵入する
「ぐほぉ！んぐぉォッ！」くぐもった呻き声をあげ続けるヴィーナス
その動きから触手がヴィーナスの体内に潜り込み続けているのは明らかだ

「ごあァッうがぉぉ！！」
体内を触手に這いづられ妊婦のように腹部を膨張させたヴィーナスが呻く
ついに触手の先端がヴィーナスの肛門から突き出た
その先端には赤い花が禍々しく咲き誇り、その中から水晶状の結晶が現れた
「また生体エナジー…失敗だわ」
「まったく何度やってもダメね。精神エナジーの抽出は無理なんじゃないのぉ？」
「な、なに言ってるのよ！こいつにピュアな心が無いからかもしれないじゃない！！」
「あーハイハイ。原因の究明はこの後好きなだけやってちょうだい。
この生体エナジーはいつものようにうちで貰っていくわよ」
「勝手にすればいいわ！」

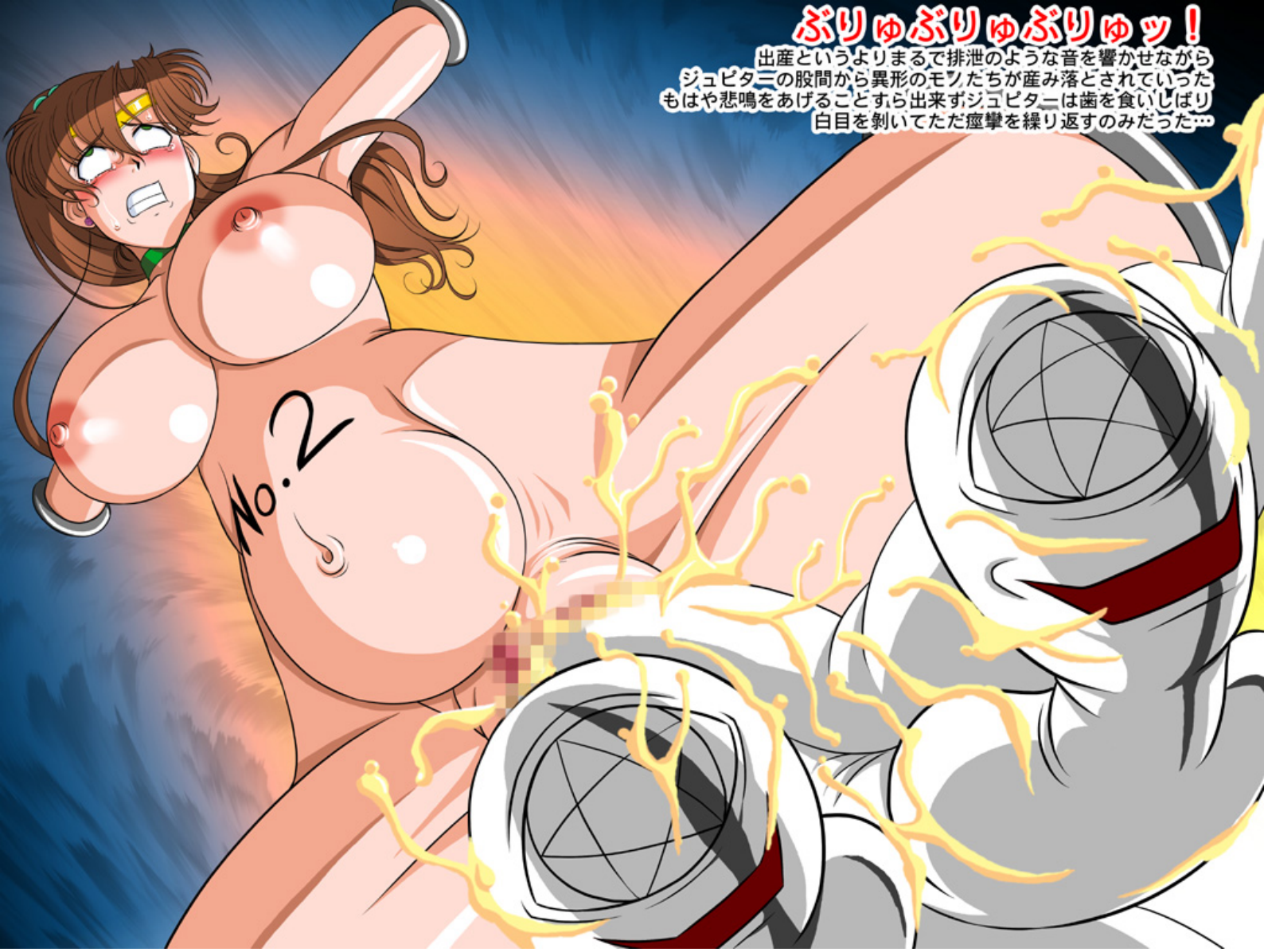
ヴィーナスの入れられていた空間と同じものと思われる
中にマーキュリーが拘束されていた
違いはマーキュリーの隣にヴィーナスの生体エナジーの
結晶が入った容器が浮かび、そこから伸びたケーブルが
マーキュリーの乳首と尿道に突き立てられていることだ
「ああ！また！も、もういやあ」
マーキュリーの悲鳴が響く
その腹には怪しげな五芒星が刻まれ
なにがしかの儀式のようだ
No.3

「はーい、それじゃ実験始めまーす」
「ヒィィイィッ――――！！！」
容器の中の結晶がバチバチと音をたてエナジーに戻り
マーキュリーの体内へと流れ込んでいく
それに呼応するかのように急激に腹部が膨張する
「ぎひぃィッ！！やめてぇーッ！」
絶叫しビクビクと痙攣するマーキュリー

ようやくのことで結晶がなくなるとマーキュリーの
腹部の膨張が止まった
「あが…あぁ…はぁ…はぁ…」
だらしなく弛緩した口元、焦点を失った瞳
今までに何度この‘実験’が繰り返されたのか
もはやマーキュリーの頭にまともな思考など
残っていなかった
やがてマーキュリーの股間からボトリと
白い塊がひとつ落ちる
それはダイモーンの卵だった
最初のひとつが落ちると次々に卵が
産み落とされていった…
「今回も大量にでたわよ。そちらに回すわね」
No.3

最後に映し出されたのはジュピターだった
他のふたり同様の空間に捕らわれたジュピター
の肉壷には透明なチューブが挿し込まれていた
外から女の声が響く「実験15回目開始」
「あぁッ！や、やめろぉッ！」
悲鳴を上げるジュピター
マーキュリーの産卵したダイモーンの卵が次々に
ジュピターの胎内に吸い込まれていった
おそらくチューブは子宮口すら貫いてるのだろう
卵はかなりの大きさにもかかわらずすんなりと
ジュピターの肉壷は飲み込んでいく
No.2

全ての卵がジュピターの腹に収まると、それは始まった
「うぎゃァあーッ！！」
絶叫しのたうちまわるジュピターの腹部は
不気味に波打ちを繰り返しながら膨張する
「しかしいい孵化器が手に入ったものね」
「並の人間じゃこの段階で破裂してボン！ですもの」
冷酷な会話が響く…
No.2


ぶりゅぶりゅぶりゅッ！
出産というよりまるで排泄のような音を響かせながら
ジュピターの股間から異形のモノたちが産み落とされていった
もはや悲鳴をあげることすら出来ずジュピターは歯を食いしばり
白目を剝いてただ痙攣を繰り返すのみだった…
No.2

映像を見終わってもレイは顔を蒼白にしたまま動かなかった
「さて、どうするね？」
妖魔が促すように尋ねるが依然として無言のレイ
「ふん。帰らないということは了承とみていいな。オイィ？」
合図とともにそれまで暗闇に留まっていた影たちが動いた
「？」
背後に気配を感じ、おもわず振り返ったレイが見たのは
毛深い獣人型妖魔の腕だった

動きは一瞬だった
獣人はレイの着物の肩に手をかけると一気に引き釣りおろす
「ひっ？！」
軽く悲鳴をあげたレイの眼前で己の乳房が肉毬となって跳ねまわった

「へっへっへっ…たまんねえオッパイだなあ」
レイの前に立った豚頭の妖魔が両の乳首を摘まみあげ弄ぶ
「ひぅッ！」
左の乳首に咬みつかれおもわず声が漏れるレイ
「まったくだ。セーラー戦士の肉は一度味わうと
並の女なんて物足りなくてやってらんねえぜ」

「一度って…どういうこと？」
床に転がされながらも気丈にレイは問いただした
「ああ？知りてえか？」
レイの両足をM字開脚させながら獣人がにやつく

「俺たちが姦るセーラー戦士はな。お前さんで四人目なんだよ」
「けけけ、そういうこと。みんないい味だったぜ」
豚妖魔がレイのパンツをずらして長い舌をレイの秘所に這わせながら答える
「俺の唾液にゃ催淫効果があってよ。亜美だのまことだのは散々よがり啼いてたんだぜ？」
「あ、あんた達ィッ！」

「ああ、そういやあ、アノ金髪にはエラい目にあわされたっけな」
「やめろよ。思い出してちんこが痛くなる」豚頭が顔をしかめる
「おっ俺にいい考えがある。おい変身ペン、持ってるだろ？」
「あん？どうする気だ？」
数分後レイの前に突き出されたのは先端に変身ペンをくくりつけた電動ノコギリだった
「最近の人間の道具ってのは面白えのが多くてな」
「な、なにをする気？！」

「へへへ…こうするんだよ！」
スイッチを入れられた電動ノコギリが変身ペンを猛烈に前後に動かし始め
豚妖魔はそれをレイの股間に押し当てた
「アアァッ！」
突然のことに驚いたレイは身を捩って逃れようとするが
獣人はレイを足をがっちりと抑えそれを許さない
変身ペンは薄布越しにレイの股間を波立たせ責めたてる

「アァー！や、やめてぇ！」
股間を変身ペンで突かれまくられたレイは叫ぶが
妖魔たちが許すわけもなかった
「こいつが体に触れてりゃ、どんな
格好でも変身できるんだろ？
おまえのお友達は尻穴に咥えな
がらやってみせたぜ？」
「そ、そんなことで、できな…」
「うるせえ！やるんだよ！」
秘裂に突き入れるように変身ペン
を捻じ込まれレイは絶叫した
「ヒィッ！あァッ！アー！」

「ま、マーズパワー…」
股間に加えられる加虐にたまりかねたレイはついに叫んだ
「メェ…い、いくぅッ！あ、アァー…ップ！」

「セー…ラー…マーズッ！」

「ぎゃはははッ！本当に変身しやがった！」
「しかもこいつイってたろ？たいしたタマだな！」
妖魔たちに嘲笑され屈辱に震えるセーラーマーズ…

「俺たちのエナジーをやると言ったがまだ方法を言ってなかったな」
獣人妖魔がマーズの頭を掴み無理矢理顔をあげさせると
そこには豚妖魔の肉棒が凶悪にそそりたっていた
「ひっ!!」
おぞましいものを眼前につきつけられ表情がひきつるマーズ

「精液にエナジーをこめてお前の体内に注ぎ込むのよ。こんな風にな！」
豚妖魔はマーズの口にその肉棒を無理矢理捻じ込む
「むぐぉ！うう！」

「先っちょ舐められてるだけでイケるわけないだろ!!オラァッ!!」
豚妖魔はマーズの喉奥にまで強引に肉棒を押し込む
「ふごォオォッ!!オゴォ!」
喉に異物を捻じ込まれ思わず吐き気に襲われるが豚妖魔の亀頭が
喉を塞ぎ吐くことさえ許されず窒息の苦痛にも苦しむマーズ
「金髪ねえちゃんの鎖にやられてからアソコを鍛えたのよ。
歯を立てられたくらいじゃどうってことないぜ!!」
豚妖魔は哄笑しながら腰を前後させマーズの喉を犯し続けたのだった

「おら！口に一発出されたくらいで呆けてるんじゃねえよ」
獣人妖魔がマーズの股間の布を掴みあげるや力任せに腰をあげさせた
フェラチオというにはあまりに暴力的な行為に呆然としていた
マーズは抵抗もせず後ろを見やる

「へっへっへ…なんだもうすっかり出来上がってるじゃねえか」
マーズの股布を破り捨て肉襞を広げた獣人がいやらしく笑う
秘裂に亀頭を押し当てられたマーズは、ようやくのことで
事態を把握し慌てたように声をあげる
「ま、待って…まだ…」

「ほらよ！」
まさに‘ズブリ’という音が聞こえそうな勢いで肉棒がマーズの腹を貫く
「ひぃーッアァッ！」
悲鳴とは裏腹に妖魔の肉棒をマーズの肉厚の襞が飲み込んでいく…

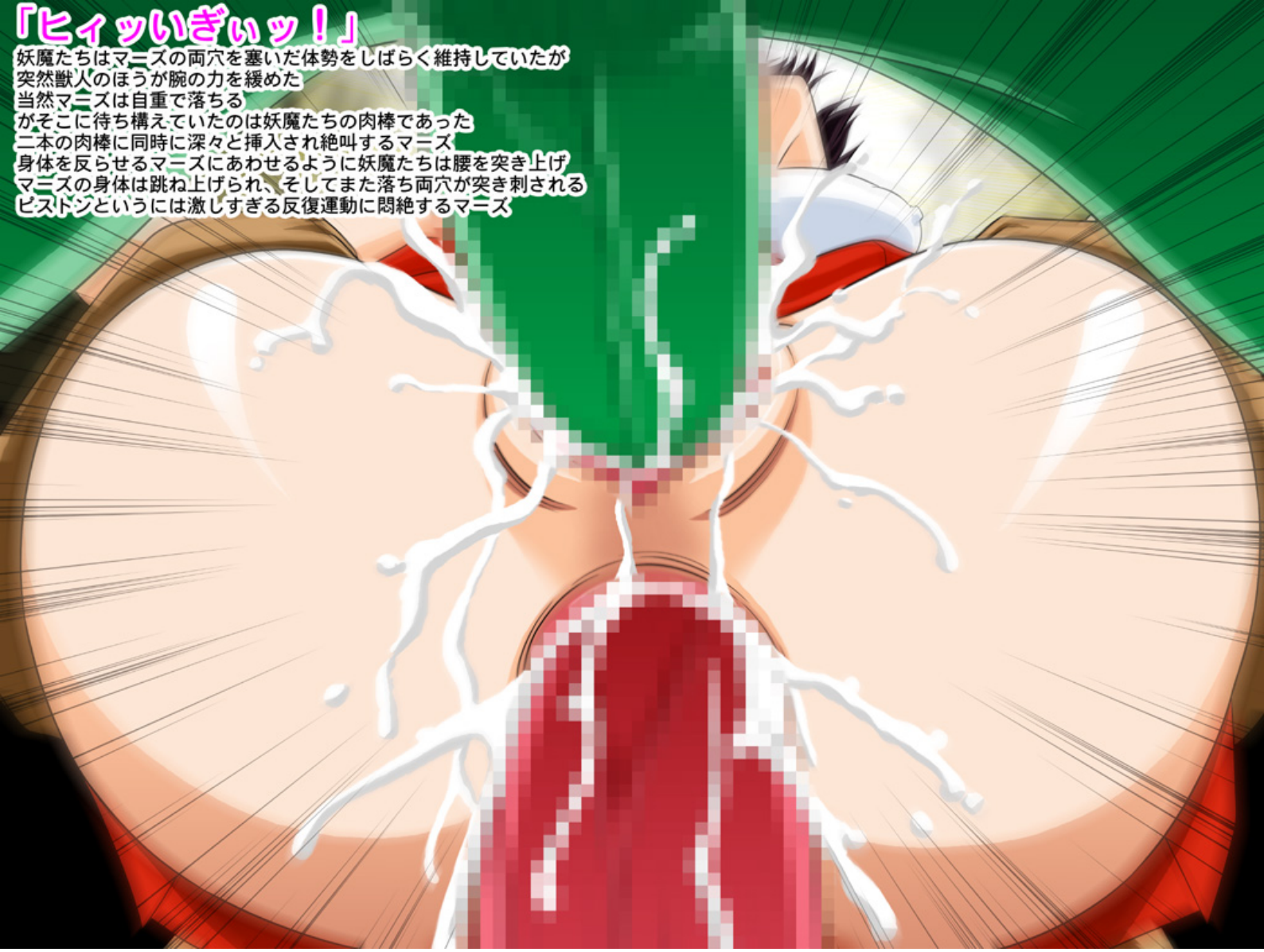
がっちりとマーズの腰を押さえ込んだ獣人妖魔
まずは挿入した肉棒をゆっくりと引き出す
カリが肉襞を抉り、子宮ごと引きずりだされそうな
錯覚すら覚え呻くマーズ「うううっ…!」

突如腰を叩きつけ獣人の肉棒がマーズの肉穴を深々と貫通した
「ひあァッ！」
マーズの尻肉が揺れるのを楽しむように獣人は猛然とピストンを開始した

「一発射精したところで‘アレ’いくか？」
「おめえも好きだな～‘二本挿し’」
「やっぱコレやらねえと女を征服したって気にならねえのよっと」
そう言うと獣人がマーズの足を掴んで抱えあげた
「…う…あぁ…な、なにする気よ？…」
秘裂と尻穴を曝け出されたマーズが不安げな声で訪ねる

一発だした直後にもかかわらず屹立したままの獣人の肉棒がマーズの
肛門にあてがわれるどさすがにナニをされるか理解したのだろう
マーズが暴れだそうとするがすかさず豚妖魔が
思い切り乳首をつねりあげた
「い、痛ッ！」
「おとなしくしてろっての往生際悪いぜ」

「うぎぃッイィ――ッ！」
肛門を無理矢理に広げ獣人の肉棒がマーズの直腸へと侵入していく
苦痛と異物感に悶え苦しむマーズにおかまいなしに今度は豚妖魔が
マーズの膣へとその肉棒を更に突きこむ
「あうぅ…く、苦しいィ…」
前後の穴を肉棒に埋められ呻くマーズ


「ヒィッいぎぃッ！」
妖魔たちはマーズの両穴を塞いだ体勢をしばらく維持していたが
突然獣人のほうが腕の力を緩めた
当然マーズは自重で落ちる
がそこに待ち構えていたのは妖魔たちの肉棒であった
二本の肉棒に同時に深々と挿入され絶叫するマーズ
身体を反らせるマーズにあわせるように妖魔たちは腰を突き上げ
マーズの身体は跳ね上げられ、そしてまた落ち両穴が突き刺される
ピストンというには激しすぎる反復運動に悶絶するマーズ

「いつまでもお前らだけで楽しんでおるんじゃないわい！」
獣人と豚にサンドイッチされ揉みくちゃにされていた
マーズを赤ら顔で屈強な妖魔が強引に引き剝がした
「お前たちのザーメンなんぞ少なすぎていつまでも終わらんぞ！」

「あぎゃッ！」
赤ら顔の妖魔の股間から陰茎が伸びマーズの肛門を貫いた
それは勃起などというより伸縮と呼ぶべき速度と長さだった
現にマーズは直腸に挿入されただけでは済まず
腹が変形するほど突き上げられているほどだった

妖魔の勃起…というより伸長は続いた
陰茎が腸を遡り、はらわたをかき回しマーズの体内を暴れまわる
それはもはやアナルセックスなどというものではなかった
あまりの激痛に既にマーズは完全に白目を剝いて失神しており
体内の異物の動きにあわせて身体を痙攣させるだけであった…

「うごぉッげぇェッ！」
マーズが失神していることに気づいた妖魔は
抱えあげていたマーズの身体を叩きおろした
妖魔の陰茎は伸びる度に射精をおこなっており
その衝撃でマーズは口から体内に溜まっていた精液を吐き出す

「ひっひぬぅ！ひんじゃうぅ…」
妖魔は腰の動きを止めることはなかった
マーズの尻に腰を打ち付ける度にマーズの体内では妖魔の
陰茎が伸びついにその先端がマーズの口から飛び出した
マーズの口を妖魔の亀頭が出たり入ったりを繰り返し
亀頭が引っ込む度にマーズの喉からはごぼごぼと異音とも
悲鳴ともつかぬ音をたてこの逆フェラチオは続いたのだった

（…あれ？…わたし…なに…やってるんだっけ…？）
（ああ…そうだ…あの子…プリンセス…うさ…ぎ…を…守…らなきゃ…）
（あ…アレ？…カラダ…動…かない…な…どう…したんだっけ）

びしゃっと顔に叩きつけられた精液の衝撃でマーズは正気に戻された
そう…妖魔たちによる輪姦儀式はまだまだ終わりそうになかったのだ
また新たな妖魔がマーズの肉体の上にのしかかってくる…

どれほどの時間がすぎたろう？
全身から妖魔の異様な匂いの精液を滴らせて
どこども知れぬ場所にマーズは立ち尽くしていたが
…やがて崩れ落ちた

妖魔たちの精液は水たまりのように床に広がっていた
そのザ＝メン溜まりに力なく横たわっているマ＝ズ…
蹂躙された膣と肛門は赤く腫れ上がりもう感覚もない
「…さあて仕上がったかな」
この妖魔グル＝プのリ＝ダー粘液人間が這いずりながら
マ＝ズの股間に手を伸ばした
「もう聞こえてるかどうか知らんが…」
「お前さんに力を与えるという話な。あれは本当だが
その為にお前さんの肉体を操るのは…」

「この俺様さッ！」
そう叫ぶやいなや粘液人間はマーズの胎内へと一気に潜り込む
戦闘服の腹部が吹き飛んだ
すでに散々拡張されたマーズの内蔵は新たな異物の侵入に屈した
子宮内から肉体の各部へと侵食していく妖魔の組織…

「ひぎぃィィィィィ――ッ！！」
それまでにない激痛に全身を焼かれマーズがのたうちまわる
ジュピターやマーキュリーもこの粘液人間に侵食支配されたが
今回は他の妖魔のエナジーも加わった人体改造による支配だった

「は…るかッ…お、お願…い…」
深夜の都会の片隅で異形の力同士の激突は決着を見ようとしていた
ダイモーン‘ウ・ラヌス’対セーラーネプチューン…
かつてのパートナーの哀願にまったく動じた様子もなく
首を掴み上げ、とどめの一撃を放とうとするウ・ラヌス

「相変わらず派手にやってやがるなあ」
ウ・ラヌスの頭上で奇妙な声が響いた
人間ならざるものが無理に声帯を動かしたような
ふたりの人間が同時に喋っているような
そんな声だった
ただの肉サンドバックと化したネプチューンへの攻撃を止め
ゆっくりと見上げるウ・ラヌスの視線の先には…

そこにいたのはセーラーマーズにしてマーズではなかった
目は異様に輝き口元はいやらしく歪んでいる
「どうも上手く服を構成できんでな
お前さんの格好と大差ないようだからかまわんか
この姿で会うのは初めてだが…
この前の借りを返しに来たぜ」

「んじゃまあ早速光と闇のあわせ技、試させてもらうぜ！」
振りかざした指先に炎の力が法陣を形成しウ・ラヌスを狙う
セーラーマーズの基本技ファイヤーソウルだが強大な
エナジーの集中がこれまで以上の威力を感じさせる
これならウ・ラヌスのワールド・シェイキングすら
撃ちぬくことなど容易いであろう…

だが…更なる力の集中を図った途端に法陣は弾けとんだ
それまでに集めたエナジーが突如雲散霧消したのだ
まるで燃え上がった炎に‘水’でもかけたが如く
?

「…あ」
（…俺って水属性じゃん…）
ウ・ラヌスの蹴りで叩き潰されつつ
マーズの肉体を操る妖魔はその理由に気づいた

「俺としたことが…選ぶ相手を間違ったとはッ」
なんとも間の抜けた展開に妖魔は焦った
どれだけ力を集められても
発動できないのでは意味は無い
すぐにもウ・ラヌスの第二撃がくるだろう
とるべき道は…

「緊急離脱ぅッ！」
マーズの股間から粘液人間が飛び出る
「ちょ！ちょっとアンタ！な、なにがどうなって…」
突然肉体のコントロールを戻されたマーズは混乱した声をあげるが…

「げぼぉッ！！」
頭上から加えられたウ・ラヌスの追撃がマーズの肉体を撃ち砕く
その衝撃を利用して妖魔は完全にマーズから分離、遁走した
「悪いな。ちょっと計算ミスったわ～…」
遠ざかっていく妖魔の声がマーズの耳に届いたかどうか

「ぐはッ！ぎゃァッ！」
ウ・ラヌスの更なる攻撃がマーズを打ちのめす
ヴィーナスもこの体勢ではなす術も無く敗れたように
打ち下ろされる拳にただ悲鳴をあげるだけの肉袋と化す
…やがてセーラーマーズは動かなくなった…

無限学園所有の某地下研究所ー
「修復用ナノマシン注入完了…っと」
ウィッチーズ5のひとりでありナノマシンの専門家ビリユイは呟いた
目の前には粘液の満たされた大きめの風呂桶がある
「うちのナノマシンの生体実験の材料としては重宝するけど…」

「これだけ壊されてまだ生きてるなんて…
なんて頑丈な連中なのかしらね。セーラー戦士ってのは」
スイッチが入れられナノマシンの調整槽から
吊り上げられてきたのは…
デスバスターズの新たなる実験動物セーラーマーズだった

地下室でセーラー戦士四人が水槽の中で浮かんでいた
それを前に白衣の怪人が声を張り上げた
「ふうむ？サンプル動物の採集が随分上手くいっているようだねカオリナイト君？」
「ええ、教授。なかなか良い素材のようで各ラボからも研究が大分進んだと報告が」
「素晴らしい！いよいよ聖杯探索も本格的に開始できる時が近づいたわけだ」
「はい教授。すべては我らが主ファラオ90のために」
「ふはははははははッ！」
暗闇の中でいつまでも怪人の哄笑が響いていた…
ＥＮＤ